

市民の劇場 〈第162回〉
アジア フェスティバル (パートⅢ)

キルギス映画 (中央アジア)
『ブランコ』 PM6:00

韓国映画
『風の丘を越えて』 PM7:00

2月16日 岐阜市文化センター小劇場

ウズベキスタン映画 (中央アジア)
『UFO少年アブラジャン』 PM5:30

インド映画
『魔法使いのおじいさん』 PM7:10

2月17日 岐阜市文化センター小劇場

中国映画
『哀戀花火』(あいれんはなび) PM2:00

中国映画
『息子の告発』 PM4:10

2月18日 岐阜市民会館大ホール

1日券=1,000円 3日間通し券=2,000円

アジア映画のタベ

■主催/岐阜市・(財)岐阜市公共ホール管理財団 ■協力/国際交流基金・(財)国際文化交流推進協会(エース・ジャパン)
■後援/岐阜県教育委員会・(財)岐阜県国際交流センター・岐阜県日中友好協会
■前売り・問合せ/岐阜市文化センター TEL(058)262-6200 岐阜市民会館 TEL(058)262-8111

キルギス映画 「ブランコ」 1993年 監督/アクタン・アブディカリコフ カラー 48分

'93年口カルノ映画祭短編部門グランプリ受賞

荒涼たる高原に吹き荒れる砂嵐。画面の手前に立つ高木と遠くに見える貧弱な低い家々。林。その木の幹に白ペンキを塗る老人。彼がゆっくりとその木から離れると、少女の笑い声が聞こえ、遠くに揺れるブランコが見えてくる。風音はいつしか止んでいる…。この作品はひじょうに象徴的な構成となっている。映像的には主人公の少年、少女、精薄の青年、老人、水夫、村人達、高原の寒村、林、草原、ブランコ、貝殻、岩山。音の素材は、映画の中で反復される比較的単調な民族音楽、風の音、波の音、その他はいわゆる現実音である。

幼い少年がほのかに暮ら娘のもとに、ある日、セーラー服姿もりりしい水夫が帰ってくる。娘とブランコで遊んだ少年の至福の日々は永遠に去ってしまった。ユーモアと哀で幼年期との世界を詩情豊かに描いた作品。

国際交流基金主催の中央アジア映画祭において最も人気があった作品である。



韓国映画 「風の丘を越えて」 1993年 監督/イム・グォンテク カラー 113分

'93年大鐘賞最優秀作品賞、他6部門受賞 '93年上海国際映画祭最優秀監督賞、最優秀主演女優賞受賞

舞台は1940～60年代の朝鮮半島、全羅道。血こそ繋がらないものの互いに強い家族意識に結ばれた旅芸人の一家が、町から町へと旅を続けてゆく。パンソリという韓国固有の伝統音楽の正統的流派から追放された父親は、娘のソプファに唄を、息子のトンホには太鼓を教え、二人はやがて名コンビに成長するが…。

韓国の伝統的な演芸芸能パンソリはある時期から外国の現代音楽に押され完全に疎外されてしまった感があった。しかしパンソリが全編に渡って流れるこの映画をきっかけに、韓国では一大パンソリ・ブームがおこった。この映画は伝統芸能を頑固に守りぬく旅芸人親子の日常を通して伝統芸術の衰退を哀切に満ちた瑞々しい映像美で描ききり、韓国文化の本質を追及した映画として新たな韓国映画の時代を築いた記念すべき作品となった。



ウズベキスタン映画 「UFO少年アブドラジャン」

1992年 監督/ズルフィカール・ムサコフ カラー 88分

映画の最初に、アメリカのS.スピルバーグ監督へ送った手紙が読み上げられる。「…あなたの方のところで映画の中で円盤が飛んできましたが、私達のところには本当に飛んできたのです…。このいかに純朴そうな男の声によるナレーションは映画全体に渡って聞こえ、この映画の民話的・寓話的雰囲気強調している。巨大な野菜や空飛ぶ獣といった全く非現実的なイメージが農村の日常生活の描写に溶け込んでいる。

のどかな農村に舞い降りたUFOから表れた不思議な少年。彼の超能力で、村ではんやわんやの犬騒ぎ。スティープン・スピルバーグに捧げられたユーモアとやさしさあふれるSFファンタジーで大人から子どもまで楽しめる作品である。



インド映画 「魔法使いのおじいさん」 1979年 監督/G.アラヴィンダン カラー 88分



この映画は、児童映画の小品なのだけれども、そこに結晶した監督アラヴィンダンの生まれ育った南インド、ケララの森と野原の自然の美と、子どもたちの純真さが素晴らしい。その子どもたちの無垢の目に映じたやさしい魔法使いのおじいさんの神秘性。その神秘を讃える子どもたちの合唱の音楽的な高さ、美しさ。お金をかけないごく単純なトリック撮影の生み出すユーモアの喜び。人間が犬に変身するというファンタジーも、ここではまったく自然なこととなる。

見る人のすべてをやさしく美しい童心の世界に誘い込まずにはおかない児童映画の傑作である。

中国映画 「哀戀花火」 1993年 監督/フー・ピン カラー 117分

ハワイ国際映画祭グランプリ受賞 '94年ベルリン映画祭青年論壇賞受賞

「哀戀花火」という美しいタイトルのこの映画は、これまでの中国映画とは違ってリラックスして見ることができる作品である。中国国内で、公開されると大学生に最も支持された作品として各地で大ヒットを記録し、各国の映画祭からも出品依頼が殺到している。

清朝末期、黄河のほとりで爆竹を作ってきた老舗の女主人と行きずりの絵師の恋愛、それをばむ中国社会的因習と封建制を甘美にしかも哀愁をもって美しく描いている。清朝末期の爛熟した世界を踏まえ、爆竹や花火が背景としてふんだんに使われ、これまでの中国映画にはあまり出てこなかった華麗で洗練された世界を存分に楽しめる映画である。



中国映画 「息子の告白」 1994年 監督/イム・ホー カラー 98分

'94年東京国際映画祭(京都大会) グランプリ・監督賞受賞

14歳の時に病死した父の死因に疑惑を抱き続けていた青年が、解放軍を徐隊し10年を経て、受する実の母親を殺人容疑で当局に告発するという、中国安徽省で実際に起ったショッキングな事件をイム・ホー監督が取材を重ねて脚色。人間の魂の根源に迫るテーマを、観客を引き込む語り口で映画化した。

母が経営する豆腐屋の立ち込めるもや、ブルーと白を基調としてとらえた風景、油絵を思わせる画面が美しい。その美しい画面に日本人ミュージシャン大友良英のシンプルかつ優美な音楽が冴える。

平安遷都1200年を記念して、京都で行われた東京国際映画祭(京都大会)で、グランプリ、最優秀監督賞を受賞しイム・ホー監督は香港の監督としては、初の国際映画祭グランプリ監督となった。

